

第三宣言

一九七八年八月

最近の数カ月は、人民にとって深い不安に満ちたものであった。なぜなら、人民は、將軍ロメロの政府が加えるいっそう厳しい弾圧に堪えなければならなかった。ロメロは、ANEP（全国私企業連合）と結託して弾圧を強め、すべての人民を敵に回した戦争で毒をまき散らしている。

いわゆる反テロリスト・キャンペーンを開始したのはANEPであった。このキャンペーンは、奴らの行動が徹頭徹尾、人民に敵対するものであることを、はからずも描き出すものとなった。このキャンペーンと歩調を合わせて、政府はすべての人民に対する戦争を発動し、追跡、家屋・丘陵の搜索、山岳地帯での狩り立てをこととしてしている。その結果、弾圧部隊によって捕われた者一〇〇名、そのなかには生後六カ月の幼児や一二歳の子供までもが含まれており、殺害された農民は六名に及んでいる。

民の生活の諸条件を悪化させている張本人であるブルジョアジーと政府に対して、一時たりとも休むことなく戦いつづける必要性があることを理解していることによっている。將軍ロメロの政府は、ブルジョアジーの忠実なる代表として、ブルジョアジーの利益の減少と人民の戦闘性の高揚という形で現われている現在の経済危機を以下の手段を弄して切り抜けようとしている。

1. インフラストラクチュア関係工事のための借金で、国の抵当を増大させている。
2. 多国籍企業がサルバドル人民を搾取しやすくする経済的便宜を与えることによって、同資本に直接的に隷属している。すなわち、各国で支払わなければならない賃金に比べて低い線に押え、税金の支払いも免除している。
3. 観光事業を促進し、それに伴い建築産業への投資を増大させている。
4. サルバドル人民を外国で働かせるために送っている。

RN（レシステンシア・ナショナル民族抵抗）は断言する。労働者人民の生活の諸条件は、政府がとりつつあるかかる施策によつては少しも良くなるらない。現体制の打倒と生産手段における私有制の廃絶によつてのみ、それは可

益を擁護するために活動してきた広く知られた人々なのだ。つまり、政府としては自らに反対する者に対して、ゲリラに加わっていると非難することによって、彼らを無力にしたいということなのだ。

政府がFARN（民族抵抗武装軍）について断言していることすべてを、われわれは否定する。かかる断言は、人民をして自らの前衛組織に対する信頼を失わしめることを第一の目的とする、ためにする中傷であり虚言である。われわれはサルバドル人民に要請する。政府のキャンペーンを信ずるな。奴らの仮面を剥ぎとれ。そして他ならぬわれわれ自身のコミュニケーションを待っていてほしい。

人民は拱手傍観していたのではない。政府の猛々しい一撃ごとに人民は告発、動員、集会等で対決してきた。このことは、基本的には人民が、労働者・農民階級および全人

能となるのだ。つまり、現在はブルジョアジーのポケットに入りこんでいく利益を労働者人民の間で分配できるようにすること、そのためにこそ、われわれは戦っているのだ。RNと人民の一体性は、もはや打ち消しがたい事実である。だからこそ、われわれは、人民に対してかけられた弾圧への報復として、一多国籍企業の代表を捕虜としたのである。

われわれはすでに第二宣言において、ブルジョアジーに対して報復することを警告していた。今回はこの路線を補足して、すでに設立されている、あるいはこれから設立しようとしている多国籍企業に対して警告する。弾圧がつづき人民の組織に何らの保証もない限り、われわれはおまえたちも報復の対象とする。おまえたちがエル・サルバドルの労働者に対して支払っていない賃金を、戦争税の形で支払わせ、政府の申し出た便宜で得られたおまえたちの膨大な利益は、ここで人民の闘争のために役立てられることになるのだ。

エル・サルバドルに触手を伸ばしている同一の多国籍企業に搾取されているスウェーデンと日本の人民に革命的な挨拶を送る。解放を目指す激烈な闘争のさなかにあるグアテマラおよびニカラグアの人民にも挨拶を送る。社会主義の祖国を強化しつつ日々前進をつづけるキューバの人民と

政府に対しても革命的挨拶を。

F A R N 万歳。

ゲリラ万歳。

人民の軍隊万歳。

明日の社会主義を目指して、今こそ武装闘争を。

R N (レシステンシア・ナシオル) 全国委員会

一九七八年八月。

〈写真説明／1頁より続く〉建物の外では B P R 支持の集会・デモが連日行なわれた。五月八日、中央聖堂前で集会したあと堂内の占拠者に食事を届けようとした人々に対し、警官隊が発砲、23名が殺害され、56名が負傷した。二日後、一万五千人の群衆は「血の色を忘れるな」と叫びつつ追悼デモをした。



■エルサルバドル R N (民族抵抗) 全国指導部■

第四宣言

一九七八年二月

アナスタシオ・アキノ

ファラブンド・マルティ

サウル・サンティアゴ・コントレラス

ロケ・ダルトン・ガルシア

フェリペ・ベニヤ

リル・ミラグロ・ラミレス (捕囚)

『サルバドル革命の英雄たち』

序

社会主義と帝国主義、被搾取者と搾取者、ブルジョアジ
ーとプロレタリアート、これらの両者の間の闘争は尖鋭化
し、すべての手段を尽してこの闘争に勝利しようとするこ
れら二つの巨像の不可避的な対決は、日まにその姿をあ

らわにしつつある。

帝国主義は、資本主義体制の構造的危機のなかにあつてその触手をすべての従属国に伸ばしている。この危機は、日本とドイツをして、地盤を失ないつつもその危機を従属国に転化することによって未だ崩壊するには至っていないヤンキー帝国主義との間で覇権を争わしめる状況をつくり出している。

富の宝庫たるわがアメリカは、ラテンアメリカ人民の間で配分されるべきその富の大部分を毎年のように持ち去る帝国主義に収奪されつつづけている。わがアメリカ、軍人どもに抑圧されているこのアメリカは、クーデタを指導し、人権を侵害していると偽瞞的にも「非難」している当の政府に対して武器と軍事訓練を提供しているヤンキー帝国主義によって侵略されている。帝国主義は、人民に対して行使している経済的政治的権利を失なうくらいなら、人民の諸権利を侵略する方を選ぶのだ。

中央アメリカは特に、或る時は土着寡頭政府と、また或る時は圧制者ソモサと結託して、この戦略的地域を、軍靴の下に、そして人民に対する絶えることのないテロと虐殺の下に縛りつけている帝国主義者の略奪と抑圧に苦しめら

れている。

具体的にいうならば、エルサルバドルにおいて、軍事独裁政権は、ただでさえ低い賃金に比して不釣り合いな物価の値上げによって、ブルジョアジーの利益を防衛している。奴らは、人民に対する弾圧をこととすることによって、その政治的利益を擁護している。暗殺の手下人どもにけしかけ、司祭たちを追放し、農民・学生・労働者を虐殺している。ストライキ中の工場を襲い、農村や都市の住居を搜索しては略奪している。政治活動家の家族に拷問を加え、わずか生後六カ月や一二歳の子供たちを捕え、政治囚を行方不明にし、労働組合事務所に介入しては荒し回っている。体制に同調しないカトリック教会を攻撃し、女性たちに暴行している。これらすべての事実にしても、わが国の政治的現実のほんの一端でしかない。農村でも都市でも賃金はあまりにも低く、失業率はあまりにも高いから、人民は自らの肩に負わされているこの危機に無関心ではおれないのだ。

民族抵抗(RN)は、人民、とりわけ労働者階級と分かち難く結びついた組織として、革命的プロレタリアートの先頭に立ち全人民の前衛となることを望んでいる。そして、大衆的革命戦線、および長期革命戦争と蜂起の発展のための基本的な組織機構としての革命軍の形成と強化に努めている。

いるごとく、美しい言い伝えとして永遠に刻みこまれている。それは、わが人民が展開した通常ならざる形態の戦争にはまったく慣れていなかった侵略者どもが未だ知ることのない、最初のゲリラ戦として戦われたのだ。この言い伝えは、中央アメリカの一地域で侵略者どもに強い幾多の前哨戦が有していた性格としての、人民の戦いの精神を、真実、刻みつけている。

サルバドル人民の屈することなき精神は、そのご永い年月を経て、アナスタシオ・アキノとノヌアルコス蜂起に現われる。彼らは、支配と搾取に抗して戦い、当時における先住民の諸権利を擁護する体制を、一時的とはいえ樹立しえたのだ。

これらは、われわれの歴史においてすぐれた事例のいくつかではない。歴史を詳細に検討するならば、軋に縛りつけられぬようにスペインの搾取に抗して戦われた戦いのなかに、そして現代の革命的民主的戦いのなかに、これらに類似した戦いは数限りなく見出すことができる。それらは、民族抵抗(RN)が復権しつつある闘争の人民的伝統を形成しており、それゆえ、サルバドル人民と共に現実遂行されている英雄的闘争に合しつのであるのだ。

エルサルバドル 四六年間の軍事独裁と占領

世界は、一九二七年におけるサルバドル人民の英雄的闘

いる。われわれが今次作戦を遂行しているのも、サルバドルの英雄たちを追悼し、わが人民と全世界がわれわれの提起していることを検討してわが国を貫ぬいている現実を知ることができるよう望むからである。

蜂起・抵抗闘争・解放闘争はエルサルバドルにおける人民の伝統である

サルバドル人民はあらゆる形態の支配に対しても常に英雄的に戦ってきた。人民はいかなる迫害にもめげず、いちどとして敵に膝を屈することなく敢然として戦ってきた。われわれは未だ勝利をわがものとしてはいないが、解放を希求する精神を決して曲げることなく血で贖いつつ保ち続けている。この同じ血をもつて、われわれは、搾取者どもの手によつてはねじ曲げることのできないわれわれの理想を守り続けてきた。われわれの血は祖国の大地に流れ、その大地を豊饒にした。インディオ・アキノの大地を。そして、フェリシアノ・アマの、マルティの、ルナの、サパタの大地を。人民は、われわれの先達たちが遺したこの貴重な遺産を、よく受け継ぎ、守ってきた。

スペインがわれわれを侵略して以来、わが人民は外国の支配の軋に屈するがままに流されることなく勇敢に戦った。村を避難して山へこもりそこを拠点に執拗な戦いを展開したアトラカトルの物語は、ロケ・ダルトンがよく描写して

争の歴史を知らなければならぬ。そこに発現されたわが国における革命的伝統は、一九三二年に最高度に表現されるに至る。その時わが人民は、それまで自らに強制されてきた巨大な悲慘と搾取とを振り払おうとした。人民はそのいつさいのエネルギーを解き放ち、強いられてきた際限なき悲慘と抑圧とに終止符を打つ社会主義体制を、ラテンアメリカで初めて樹立するために蜂起したのだ。

一九三二年から一九五〇年にかけては恐怖体制の下におかれ、占領した国内軍に対する人民の抵抗闘争が發展し、軍に対して小規模ではあるが無数の武装攻撃・消耗戦・破壊活動が、創意と工夫に満ちた形態で戦われた。それはサルバドル人民の、反独裁・反軍事支配の精神を余すところなく示すものであった。

一九五〇年から一九七〇年にかけては、人民は民主主義のために、軍事支配を終らせるために戦った。人民は終ることのない一連のストライキをもつて、もはやこれ以上の軍事支配に耐えることはできないことをはっきりと示した。人民の闘争がとるべき新しい方向を模索しようとしていたサウル・サンティアゴ・コントレラス、オスカル・マルティネス、ハイメ・エルナンデスが暗殺に斃れたのは、まさにこの時期であった。

一九七〇年以降、武装せる運動は組織化された性格を獲

得し始め、抑圧軍に対する遭遇戦・占拠・攻撃が繰返し戦われた。人民はその執拗な抵抗・解放闘争のなかで各地で局所的に蜂起した。この時期をもっともよく体現しているのは、敵との戦闘に、れたフェリペ・ベニヤ同志、解放闘争に参加しているサルバドル女性の典型であるリル・ミラグロ・ラミレス同志である。リル同志は、軍事独裁に抗し社会主義樹立のために戦っていた二〇数名の愛国者と共に逮捕され、国家警備隊の監獄内で「行方不明」となっている。

一九三二年、レガラド・ドウエニャス一族および將軍マルティネスの指導の下で、われわれの歴史のなかでも最悪の虐殺が行なわれ、三万人以上の農民・労働者が殺された。將軍マルティネスは、蜂起を口実にそのような虐殺をしたのだ。共産主義者であるという容疑の下で、数千人の愛国者たちが死刑台におくられた。暗殺された蜂起指導者のなかには、マルティ、ルナ、サバタ、フェリシアノ・アマがいた。

一九三二年、軍人たちは権力にもぐりこみ、それ以来ここにちに至るまで大統領はすべて軍人である。サルバドル軍は弾圧をこととし、町や村の略奪、婦人への暴行、住居略奪による悲惨な状態への住民の放置、いつさいの集会をも阻止するための公園占拠、暗殺、政治的理由による逮捕、

村落全員の虐殺、生活条件の改善を要求する集会参加者の虐殺……に奔走している。一九七二年以降、国家警備隊が村落や集会を襲って殺害した無防備の住民は四千人にのぼっている。国家警備隊はさらに八百人の住民を、特に選んで殺害し、発効後わずか六カ月の公共秩序安寧法なる法律の下で百人の人々を行方不明にし、三百人を政治囚として拘留している。この法律は、令状なしで逮捕したり裁判外の自由を唯一の拠り所にして被告に判決を下したりする権限を政府に与えている。エルサルバドルはまさに、布告なき戒厳令下に恒常的におかれているということが出来る。將軍ロメロの軍事独裁政権は、わが国における人口増加に対する政府の恐るべき回答として、住民の皆殺しというマルサスのな地政学を本質とする血まみれのテロ行為を拡大して、ファシズムへと向いつつある。

トマス・レガラド・ドウエニャス 反動の頭目
サルバドル人民が縛りつけられている抑圧と悲惨のこの政策は、国家権力を自らの掌中におさめて何回となく政府に圧力をかけては自分勝手な政策を押しつけてきた寡頭支配者・トマス・レガラド・ドウエニャスによつて推進されている。

一九六九年、当時の政府が知ることもないまま、ホンデユラスへの侵略・侵攻を命令したのは、他ならぬトマス・

レガラド・ドウエニャスであった。同様なことは、この寡頭支配者の所有にかかる中央砂糖会社でも起った。賃金引上げを要求して労働者がストライキに突入して二四時間後に、国家警備隊が同社に投入されたのだ。將軍ロメロの政府はそのような事態が起きてはじめて軍隊による占拠の事実を知らされたのであり、自らは手を下す暇さえなかったのだ。

トマス・レガラド・ドウエニャスはブルジョアジー内部でももつとも反動的な部分と結託し、別な寡頭支配層が打ち出してくる改良主義的諸施策を妨害している。トマス・レガラド・ドウエニャスを頭目とするひとにぎりの軍人たちは、民主主義的自由を廃止し、人民を敵とした特殊戦争を遂行し、わが国にファシズムを根づかせようとしている。それ故、奴らはサルバドル人民を、より劣悪な経済的諸条件と政治的弾圧の下に封じ込めようとしているのだ。

スピリヤガ、ロメロ、ロサレス、イラエタ、カステイリヨ・ヤニェス テロ行為に奔走する軍部徒党団

トマス・レガラド・ドウエニャスはその壁下に、サルバドル人民に対してありとあらゆるテロ行為をはたらくファシスト軍人の徒党団を擁している。農民部落の略奪、女性への暴行、町や村の絶滅、虐殺、政治囚への拷問、政治囚の行方不明や暗殺、牧師・労働者・農民・学生・教師の暗

殺、ストライキへの弾圧……これらはすべてその徒党団の責任である。最高位に位置するこれら軍人たちが展開している、人民に対する一連のテロ作戦は終るところを知らない。だからこそ、われわれは、これは奴らに贖なわせずには済まぬ戦争犯罪であると主張するのである。

人民に対するこのようなテロ作戦は、軍内部の将校・下士・兵卒に対してなされている警察による監視作戦と相互に補完し合っている。軍隊内には憲法擁護の伝統があることを奴らは知っており、徒党団が侵犯を繰返すごとに、クーデタの動きを恐れるのである。かくて、数百人の兵卒が政治的理由で逮捕され拷問にかけられたりすることが起るのだ。つまり、人民に対するテロ作戦はまた——ほとんど知られてはいないことなのだが——軍内部におけるテロ作戦をも包括しているのである。

將軍ロメロの奇弁と犯罪

政府は、港湾労働者の組合事務所、政党、選挙管理人、教師の自宅……等々への襲撃事件を国際報道機関に知らせていない。都市や農村で行なっている令状なしの、数百件の略奪や搜索の事実も隠蔽している。軍の銃器を盾に、略奪、女性への暴行、教会やその祭壇への軽侮、老人や子供への殴打が日常茶飯のごとくなされ、妊婦に流産させたり、病院から患者を誘拐したりという事態が繰返されてい

だからこそ、われわれは、將軍ロメロが言うごとく通常ならざる手段を用いて、このような公表形態をとらざるを得ないのである。それ以外に、われわれの考えに耳を傾けさせ、それを知らせる手段はないのだ。このことから明らかなく、革命組織は犯罪集団でもテロ集団でもない。人民が報道機関の側から抑圧と検閲にさらされている時、われわれは、四六年間の軍事独裁に抗して立ち上ろうとする人民の正当な手段として、この途を選ばざるを得ないのである。

マツモト氏の場合

將軍ロメロの政府は、いわゆるマツモト氏の場合に関して、厚顔にも恥知らずな策を弄し、われわれの組織がこの日本人企業家を背後から一刺しにして殺害したと世間に信じこませようとしている。暗殺者の異名をとるこの將軍は、つまり、警備隊や警察が人民に対して用いているのと同じ加虐的で残忍な手段をわが組織も用いているのだ、と信じこませようというのだ。このようにして政府は、われわれの組織がいかにも邪悪なものであるようなイメージをうえつけ、外国人企業家に対する自分の冷淡さや、数百人の政治囚を行方不明といいつつ未だに監獄に閉じ込めておいて自らが感じる喜びをおし隠そうとしている。われわれとし

ることを、世界に隠している。これらの犯罪的行為はその数がありにも多く、軍によつて殺害された人々がいかにもその身体を切り刻まれ拷問の跡もくつきりと残っていたかを、ヨリ詳細に逐一明らかにすることはここではできない。

將軍ロメロは、国内が安定し人権も尊重しているというイメージを与えるために、このように犯された残虐行為をひた隠しにして世界には知られずにおきたがっている。この主張には根拠がある。「破壊活動に関わる」と考えられるような報道はいっさい検閲されているからだ。大規模な報道機関は、検閲体制をしき人民の各組織にはさるぐつわをはめるといふ政府の弾圧政策に協力している。政府は、中小の報道機関に対しては、補助金も広告も差し止めるぞと脅したり、テロ活動と関係しているという理由でKLY一〇八〇ラジオ放送に対してなされたような、軍による局の占拠、「人民新聞」紙への脅迫のような一連の脅迫・テロ作戦を展開している。同様に、カトリック教会やプロテスタント教会の新聞・ラジオに対しても脅しをかけている。このような状況をまえに、SIP（米州新聞協会）が何らかの最低限の反応でも示すことは、常に期待されてきたことである。わが国が生きていくこのような抑圧と検閲の体制は、報道を無きものにし、外国通信社がサルバドルの現実を報道する自由を妨害しようとする、強化されつつある

ては、事態の真相を明らかにし、將軍ロメロや心理作戦部隊G-2のぼかした策略を暴露しなければならぬ。

われわれは、五月一七日に捕虜作戦を遂行し、家族に対して五月二十六日までに次のような要求を満たすよう通告した。

- (1) 政治囚への全面恩赦。
- (2) 行方不明者といわれつつ弾圧機関の監獄に拘置されている戦時捕虜の釈放。
- (3) 新聞、ラジオ、テレビを通じての、声明・宣言の公表。
- (4) わが組織に対する四百万コロンの供出。

基本的要求は、戦時捕虜の釈放を獲ちとることにあった。そこで、わが国が日本帝国主義に経済的に大きく依存している現実を考慮し、一日本人企業家との交換でその要求を実現しようとしたのである。日本帝国主義は、われわれが生産する綿花のほとんどすべてを買いつけ、しかもわが国に現存するなかでも最大の工場二つを保有している。ロメロの政府は、日本との貿易のために国庫を大量に放出するのと引き換えに日本庭園公園を建設してもらうほどの関係を結んでいる。

將軍ロメロは、政治囚の釈放に応ずべきものかどうかを、トマス・レガラド・ドゥエニャスに相談しなければならなかった。寡頭支配者の答えは、否！であった。そのため

將軍ロメロは日本帝国主義を口実を設けて支持し、われわれが準備していた声明の公表を認めなかった。

家族といえは、企業家の釈放と引き換えにわずか四万ドルの供出を申し出ただけだった。このこともまた、当の多国籍企業が自らの代表格の人物にもまったく冷淡でしかないことを示していた。この企業の資産は五億ドルにも垂んとするのであるから、われわれの要求はその千分の一にも満たないのである。

將軍ロメロはうそをでっちあげる一方、スピリヤガと結託して、われわれの要求に従うことなくマツモト氏を見つけ出そうとして軍事作戦を展開した。サンサルバドル市およびその周縁都市の隅から隅まで、すべての国家警備隊とすべての大農園の私兵が動員された。

国家警備隊がマツモト氏のいた場所へ近づいた時、FARN（民族抵抗武装軍）のメンバーは、本部から受けていた指示に従いマツモト氏を連れて逃げた。しかし不幸なことに、われわれが乗っていた車に国家警備隊は停止を命令し、止むを得ず戦闘に突入した。マツモト氏はこのとき交された銃撃戦のさなか、背に銃弾を受けたのである。

不幸なことと言わなければならない。このような事態になったために、われわれは要求していた四項目のひとつとして達成することができなくなった。われわれの要求を認

めさせるためには、捕虜にした者を生かしておくのが唯一の道であることは絶対に明白だからだ。われわれは、政府が世間に信じこませようとしているのとは逆に、マツモト氏を殺害しようなどとするはずもなかった。捕虜としたその日のうちにわれわれが背中を一刺しにして殺害した、とは何という言い草だ！ 国家警備隊心理作戦部隊の頭の中にしかないような、この信じられぬほど邪悪な行為を行なう理由など、われわれはまったく持っていない。

政府はまた、われわれが日本人企業家を埋葬してある場所の見取り図を後日送ったことを隠している。われわれが直面していた安全上の問題も克服できたので、われわれは遺族の信仰心を尊重してそのようにしたのである。

將軍ロメロの政府はあらためて報道機関に圧力をかけ、われわれが世界の良心に向けて告発し暴露してきたこの新手段の策謀に奔走している。そして、ロメロ政府が腐敗のただなかにあり、人民に対するテロを基盤にしてこそ成立していることを、懸命に否定しようというのである。

国連、米州機構、エルサルバドルにおける反テロリスト・キャンペーン

將軍ロメロの政府は、現在、サルバドル人民に対する自らの犯罪的行為に煙幕をかけるために、反テロリスト・キャンペーンを行なっている。わが人民や世界の他の国々の人

き方法を用いる一団であるかのようにわれわれを見せかけようとして、為にする政府の宣伝ではない。時にテロリスト、時に共產主義者というこの宣伝を、人民のもつとも進んだ部分は信じてはいない。

国際報道機関も人民も次のことを知らなければならない。この反テロリスト・キャンペーンこそは、サルバドル政府が、ニカラグア・グアテマラ・チリ・ウルグアイ・アルゼンチンの諸政府やペンタゴンと結託して行なっている悪意伝なのだ。奴らは共謀して、恥知らずにも人権などというものを口にし、テロリズム根絶を語っている。そのくせ、人民に対してなされている虐殺や戦争犯罪には口をぬぐうのだ。それどころか、「公共秩序安寧法」なる反革命的法律の庇護を受けてサルバドル軍が遂行している残虐非道な行為のいっさいを直接ないし間接に支持するよう、他国政府に強制させている。軍はこの法律を楯に、テロリストくさいとみなしただけで任意の住民を消してしまうだけの勝手気ままな自由を享受している。エルサルバドルは、今日、政府が人民に対して行使しているまごうかたなき恐怖支配のなかに生きている。科学の本を携帯することは犯罪であり、「赤の」本を持ち歩く者は迫害され、拷問室へ連行される。今日この国では、労働組合員であるだけで犯罪なのだ。なぜなら彼はストライキを煽動するかもしれぬ。

民の間に混乱をもたらすための卑劣な策謀として、革命家や愛国者を「テロリスト」と同義にしようというのだ。今日では、労働組合も牧師も学生も農民も教師も、ただ「テロリスト」として非難されるのである。このキャンペーンは、テロリズムとは一般犯罪であり、それを行なう者は進歩を阻害する社会的癌としての犯罪者集団なのだ主張することによって、世間の共感を得ようとしているのである。それはまた、全サルバドル人民を敵としたこの特殊な絶滅戦争を遂行しつづけるために、各国政府の支持も取りつけようとしている。政府は、国際報道機関を欺いているのだ。

將軍ロメロの代理人も世界に対して虚言をばらまいている。博士ロドリゲス・ポースと博士シドニー・マツツイーニはファシストのイデオログとして、わが国でももつとも尸革命な分子であるが、国連や米州機構においては人権を語りつつ、恥知らずにも反革命テロ団の弾圧政策は支持しているのである。奴らこそ国際的にもファシズムを代表し、国連が定めている原則とも敵対している連中なのだ。

われわれの闘争は、商業航空機を乗っ取ったり、スポーツ行事に爆弾を仕掛けたり、無差別に暗殺したり、子供や老人を食べたり、テロの種をまき散らしたりするところにはない。これらは、或る種の過信した宗教者のごとく恐るへ

そのストライキは、今日では反乱行動なのだ。今日この国では、単なる集会でもテロリストの行動だ。なぜならそれは民主主義的自由のための闘争を公然と煽るかもしれぬ。今日この国では、労働組合員であれば予防検束されるべき容疑者となる。教会の司祭や牧師までもが、その福音の説教ゆえに「反乱の煽動」とみなされる。今日この国では、民主主義的自由を擁護する教師さえもがファシストの公安当局によって投獄される。

ファシストのこのような行為は、大学のような文化施設においてもその極に達している。警察は、当局（学長および古参教師）と意見を異にしたというだけの理由で、学長の要求に沿って、経済学の教師や学生や職員を自由に殺害している。このようなテロ行為は、軍ならびに国家警備隊幹部の指導の下で、秩序そのものである軍やテロ団によってどんな小さな僻村にまでも拡大している。

しかしながら、人民に対するこのような戦争犯罪はすべて、報道機関が触れる術とてないために、知らされていない。今こそ告発しなければならぬ。人権だとか反テロリスト・キャンペーンだとかを厚顔にも口にして連中は、エルサルバドル・グアテマラ・ニカラグア・アルゼンチン・チリ・ウルグアイの人民にこんなに流血を強い恐怖の種を植えてくれている軍事独裁政権なのだ。

政府は国内の安定したイメージを与えたがつてい。われわれは問おうではないか。奴らが犯しているこの非道な戦争犯罪を調査しうる国際機関は何なのか？ 米州機構なのか？ 米州機構のニカラグア介入を思えば、そうではあるまい。それは人民だ。軍によって絶滅作戦の淵に追いつめられている人民だけが、この暴虐の事実を証言することができるのだ。

人民の運動は政府の言い分をいっさい退ける。政府は米州機構も国連も欺いているのだから、報道機関は十分に注意するよう国際報道機関に呼びかける。

人民の運動は、世界の新聞・ラジオ・テレビがエルサルバドルを訪ずれ、その状況を真実に反映した不可欠な報道を行なうよう、一貫して呼びかけてきた。

政府は誤まったイメージを植えていている。サルバドル政府は血と銃火のうえに居すわる、不当な反人民的政府であり、ここでも、米州機構でも、国連でも、サルバドル人民の利益を代表してはいない。

第三世界諸国は従属状態を打破することを望んでいる。われわれの闘争のメッセージを、国際報道機関、全世界、とりわけ第三世界諸国に届けることは重要である。中央アメリカの人民はどこでも、北アメリカ帝国主義への従属と軍事独裁政権からの決定的解放の段階に入っている。中央

うことはできない。その点については、ニカラグアにおける人権侵害を非難して外交政策の独立性を保持しているコスタリカ・パナマ・ベネズエラ・メキシコの諸政府の立場は勇気あるものだ、といえる。それは米国の干渉的立場をいらだたせている。第三世界人民のこのような独立的立場は、全世界に次のことを示している。今日、中央アメリカにおいては、解放を目指して戦う人民の自決権を擁護する諸国と、犯罪と虐殺をこととする勢力を支持するニカラグアその他の軍事独裁政権との間の対決の時が刻一刻と近づいているのだ。

今日、アメリカ大陸からすれば、国際政治にはひとつの新しい現実が現われている。民族解放・革命運動のただなかで戦う人民は、第三世界人民の支持を求めているという現実である。何人といえども、これらの人民を抑え込むことはできない。彼らは、人民の解放を阻害しその解放への道がより残酷で流血を伴うものになるよう共謀している中央アメリカの軍事独裁政権の下で四〇年以上ものあいだ呻吟しつつ、自らが戦うべき時に備えてきたのだ。

CONDEGA（中央アメリカ防衛理事会）に与えた政治的敗北の意義はいかに大きいことだろうか。米国との共謀によって創り出されたこの軍事干渉機構は、中央アメリカと全世界の人民の対応によって孤立させられてきた。そ

アメリカは、軍事独裁政権を打倒し尽すまではとどめようもない全面的武力対決の中心になりつつある。ニカラグア人民とその前衛であるFSLN（サンディニスタ民族解放戦線）の闘争は教訓的である。米国はその干渉政策によって、独裁者ソモサの下での人民の解放の道を、より悲しみに満ちた困難なものにしている。このような状況を眼前にして、われわれ中央アメリカの人民は単なる顧客に留まることはできない。わが人民の国際主義的自覚は高揚し、軍事独裁者どもが定めた国境を消し去り始めている。ブルジョアの民族排外主義は敗退しつつある。人民はそれぞれ最低限の民主主義的自由なりとも獲得しつつある。人民は、この道理にかなった道を閉そうとする者がある時こそ、前衛に導かれて蜂起するのだ。

全世界の前に明らかにされねばならぬ。武装蜂起は、解放のための平和的手段がすべて尽きた時には人民が採るべき正当な手段なのだ。

従属性は、人民を経済的・政治的・軍事的に強奪しているいまひとつの顔である。そこでの第一の敵は米国である。その干渉政策は、ニカラグアの場合にみられるように、ソモサを支持するというだけで振舞うのではなく調停者のような貌をして現れるというように、今日ではいつそう洗練されてきているが、その帝国主義的本性を隠蔽してしま

れは本能的で英雄的な対応であった。あとはただ、中央アメリカ人民を脅しつけているCONDEGAを破壊し、決定的に解体するだけのことだ。グアテマラ・エルサルバドル・ニカラグアにおける革命運動は、干渉軍と対決しうるだけの力を備えてきている。

それは、現在のソモサ打倒闘争が証明しているところだ。この闘争への連帯・支持は大陸的規模に発展している。ソモサ打倒に至るまで、それはいつそう増強しなければならぬ。

それと同時に、帝国主義への従属の絆を絶ち切るためには、第三世界人民は、人民運動・解放運動・革命運動を先頭として、団結の道を模索し、国際主義に依拠してこそ戦わなければならない。このようにして、人民は中央アメリカにおいて内部と外部の敵をそれぞれ打倒していくことになるのだ。

われわれは、帝国主義に支援されている軍事独裁政権を打倒するために戦っている中央アメリカ人民内部における民主主義勢力と革命勢力の団結を支持する。それは、第三世界諸国がその従属性のゆえに強いられている政治的・軍事的包囲網を打ち破るために必要なことなのだ。現在とはとりわけ、グアテマラ・エルサルバドル・ニカラグアの独裁者こそが敵である。

RN（民族抵抗）は、全世界の解放運動に挨拶をおくり固く連帯する。とくに、ゾモサ独裁体制に対して英雄的かつ執拗に戦うFSLN（サンディニスタ民族解放戦線）、グアテマラの軍事独裁体制とすでに二〇年も前から戦いつづけている兄弟組織FAR（反乱軍）、イスラエルのシオニズムに対する正義の戦いのさなかにあるPLO（パレスチナ解放機構）に対しては、解放と社会主義のための闘争のために、意義の深いメッセージをおくる。

われわれの闘争

RN（民族抵抗）は、人民の闘争の革命的・民主主義的遺産をすべて復権し、そのなかで、次のような形でその闘争をさらに推し進めていくことができるであろう。

1. 全サルバドル人民の前衛党を形成していく。
2. 以下を基盤に、革命軍を構築していく。

(A) グリラ軍

(B) 民兵

(C) 将校・下士官・兵卒に呼びかけて、ブルジョア軍のなかでわれわれの側に立つて戦う者を浸透させていく。

3. すべての人民を結集し、そのいっさいを復権するために共に戦うことを基盤とした革命戦線を建設していく。
4. ブルジョアジーの捕虜作戦を通して、人民戦争の資金を獲得していく。この資金は、武器の購入・戦士の支え・

それに抗して戦わなければならないわれわれの目的を知らせ、これに真剣に耳を傾けさせるためには、外国人企業家の捕虜作戦がほとんど唯一の、残された手段である。

われわれは、国連総会で承認された人権政策によりいっそう台致した態度がみられぬ限り、この手段を今後も用いつづけるであろう。今日までわれわれが目当たりに見ているのは、北アメリカ帝国主義および他国の軍事独裁政権がサルバドル政府と共謀しこれを支持しているという現実である。

イスラエルはいぜんとしてエルサルバドルに武器を供給しつづけている。イギリスはエルサルバドルに対する戦車の輸出を、議会の反対で拒否した時には慎重な立場を示したにもかかわらず、教育計画に関してはエルサルバドル政府を援助しつづけている。ドイツもまたエルサルバドルに対する武器の売りつけをやめてはいない。日本は、日本人企業家マツモト氏の死に関わつてのエルサルバドル政府の無責任さにもかかわらず、この政府に対する援助をやめようとはしていない。

われわれは、人民が最低限の民主主義的自由を獲得するか、あるいは以上に挙げた諸国がこのロメロ政府に対する援助を差し控えるかのいずれかが実現した時には、外国人企業家の捕虜作戦を中止する。同様に、あらかじめ明らか

他の解放運動との国際連帯のために役立てる。

5. われわれは、軍事独裁政権に対する新たな攻勢を準備している。それは、国家警備隊への攻撃、スピリヤガに指導されて心理作戦部隊を率いている諜報機関の破壊という形で具体化されていくであろう。

6. われわれは、人民の宗教的信仰を尊重する。それは人民が持つべき自由のひとつであり、それ故、その宗教的信仰を理由に誰かを迫害することはいかなる場合にもあり得ない。

7. 世界の社会主義陣営を支持し、必要とあらばその防衛のために戦う用意がある。社会主義陣営には現在、対立があつて、そのため帝国主義に対する戦線を弱体化させているが、この対立は当事者同士の間の友愛に満ちた関係のなかで解決されなければならない。それ故、われわれは、親ソでも親中国でも親キューバでもない。つまり、われわれは、社会主義陣営内部のいかなるミニ・ブロックにも加担せず、それぞれに対して独立した立場を維持しているし、今後とも維持していくであろう。

われわれはなぜ外国人企業家を捕虜にするか

われわれがすでに外国諸政府および企業に対して明らかにしてきたように、この世界には抑圧され搾取されている人民がおり、人民が生きているそのような状況を告発し、

にしておくならば、われわれの革命政府綱領には、独立した政策の枠内でサルバドル人民にとって必要であるならば、すべての資本主義諸国との通商・政治関係を結ぶことを含んでいる。しかし、解放闘争において自らの運命を定めるのは他ならぬわが人民である以上、われわれはいっさいの干渉を拒否する。

エルサルバドルにおける人民諸組織に対する抑圧状況が維持されている限り、そして人民に対する虐殺を隠蔽するためにわが国を孤立させておくという策謀がつづけられている限り、われわれはサルバドルの現実を知らせるための手段として外国人企業家の捕虜作戦を採用せざるを得ない。人民が最低限の民主主義的自由をでも手にした時には、われわれは彼らの捕虜作戦をやめるであろう。このようにいうのは、われわれの行動が有している政治的本質を理解してもらい、テロリズムを云々するエルサルバドル政府の仮面を剥ぐためである。これは、人民が支持している行為であつて、「悪質な」盗賊団などの行為ではない。将軍ロメロの政府が押しつけている状況の故にこそ、われわれはこのような暴力に訴えざるを得ないのだ。

われわれはまた、多国籍企業がこの国で搾取によつて得ている膨大な利益の一部なりともサルバドル人民に返還させるために、このような作戦を遂行しているのである。し

かし、われわれは自らが必要すべき要求の種類を見きわめるべきことを知っている。だからこそ、われわれが、米国・ドイツ・日本・イスラエルの代表たちを捕虜とした時には、わが国の軍事独裁政権を基本的に支えているのはこれらの諸国であり、それらが政治的関与を保持しつづけている現実を考慮に入れて、政治的要求も合わせ行なっているのである。

人民の運動の団結は、エルサルバドルにおいて、いままさに必要とされている

すべての手段を尽しての弾圧・搜索が行なわれ、軍隊の格子のなかにわが国は置かれている。農民の虐殺、労働組合への軍隊の介入、その指導者の暗殺、混乱を生ぜしめるための煽情的キャンペーン、新聞・ラジオ・テレビへの管制・支配、多数の政治囚、トマス・レガラド・ドゥエニャスを頭目とする軍部によって行方不明にさせられたり暗殺されたりする人々——このような現実がいかに荒れすさぶとも、サルバドル人民が、人民的民主主義・自由・平和・社会主義を目指す闘争にますます参加しているという流れを押しとどめることはできない。

わが人民は、このように、抑圧・飢餓・悲惨・哀しみの極にさらされているが、軍事独裁政権に対する闘争は、さまざまな労働組合・政治・軍事組織によって多様な形で展

開されている。全般に、抑圧者に対する人民の抵抗闘争は、その意識において、またその組織化において、日毎に前進している。労働組合・政治組織・ゲリラへの参加者が増えつつけている。

すべての組織は、そのひとつひとつは微少な力のいつさきを、長期にわたる闘争のなかにつぎこんでいる。しかしながら、サルバドルの人民運動とゲリラは、今日に至るまで、寡頭搾取階級と軍事ファシストに対して団結した共同闘争を戦いえていない。それは、現在ある諸組織の誕生とその後の経過や、それぞれが有している人民解放の道筋をめぐる評価のくいちがいはるものである。それ故、団結し共同闘争を戦うためには、一連の政治的・組織的諸条件のよりいっそうの成熟を必要とするのである。その成熟の度合によって、労働者階級・農民・小商人・そして人民一般の、即時および未来の政治的・経済的利益が保障されていくのである。生活の諸条件の改善を目指して軍事抑圧に抗して戦う人民の闘争を強化していくことを通して、人民民主主義と社会主義への道が切り拓かれるのである。

これらの点が革命の方向性のなかで明確になればなるほど、敵の魔手から有効に防衛しつつ、ブルジョア軍事権力の拡大に対して消耗戦を強いていくことができるようになり、人民の闘争は、唯ひとつの大義に合流して人民民主

義・平和・社会主義を達成するに至るのである。

にもかかわらず、人民の運動が促進しなければならぬこの団結と共同闘争とが実現されないまま引き延ばされている原因のいくつかを、最低限明らかにしておくことは、適当かつ重要なことだと考える。

まず第一に、この分裂にもつとも手を貸しているのは、FPL（人民解放勢力）である。

(A) ロメロ体制に打撃を与え、第一の敵および帝国主義に対して戦っている、FPL以外の組織もあることを認めたがらない近視眼的路線をとっている。

(B) 人民を解放に導きうる能力のあるのは自分たちだけであり、階級敵および人民の運動を分析しうるのも自分たちだけであるという前衛主義的偏向および覇権主義的傾向を有している。ところが、現実とはまったく逆に、すべての運動・組織がこの闘争を支えているのであり、彼らだけがこのような現実を理解することができないのである。

(C) 自己の無謬性を確信し自己批判能力を欠いている。経済的・政治的分析や、他の組織との関係における自己の重大な誤謬も認めようとしない。

(D) 第一の敵に対して戦い、他の政治諸潮流を導いていくうえで、共同行動が持ちうる力と重要性とを考慮に入

れることなく、人民の運動の分裂にもつとも力を貸している。その偏向の故に、FPLはサルバドル革命の前衛たりえない。

(E) 労働者階級の科学（マルクス主義）の適用において、教条主義者であり単純主義者である。

(F) 革命と社会主義のために戦う彼らの固い決意と意志は認めるが、われわれが戦うべき残忍な敵との対決で人民が勝利するためには、単なる決意だけではどうにもならない。

次に取り上げるべきは、POS（サルバドル共産党）である。

(A) この党は、その古風で正統派的な組織化および闘争の方法故に、日毎に凋落し人民の運動における影響力を失ないつつある。

(B) プロレタリアートの戦略目標のヴィジョンを失ないつつ、奇弁を弄してごまかしている。

(C) 労働者階級の政治化を停滞させて経済主義に陥いらせている。

(D) 完全に改良主義的・合法主義的枠内にあって、多くの場合において階級敵との妥協的路線を採用している（ホンデユラスに対して強行した戦争の場合のように）。闘争を推し進めるための多様な手段のなかで、武装闘争に向け

て飛躍する必要性を認識することができない。それはつまり、現実には人民を鼓舞しうる新しい闘争形態を認めることができず、わが国にある政治的諸条件を自覚していないということである。われわれはいま、人民の利益のために真に戦う組織であるならば、革命戦争や軍事独裁政権に対する蜂起を推進しないで行くわけにはいかない、そういう状況のなかにおかれているのである。

(E) しかし、この党の内部には、しかるべき路線に拠って活動するならば、人民の前衛として立派な戦士たりうる勇敢な人々もいることを、われわれは信じている。

第三番目に取り上げるべきは、E R P (人民革命軍) である。

(A) この組織は、二人の革命的戦士、フリオ・ことロケ・ダルトン・ガルシア、パンチョ・ことアルマンドを殺害したことを明らかにせず理由も示すことができないこと、国内的にも国際的にも孤立をつづけている。

(B) 明確な政治路線を持たず、右翼および極左冒険主義へと揺れ動いている。現に支配しているのは、社会主義へと向かう人民革命闘争の明確な展望を喪失した民主主義的・右翼的立場である。

(C) 自らの党員と人民のまに、自己の誤謬を認めることができない。

結の強化に向けて全力を挙げている。

(D) われわれは、革命運動の真の統一を達成するため、真剣な努力を払う。

(E) 最後に、以上に言及した諸組織の戦士に呼びかける。マルクス・レーニン主義の原則にのっとり、内部で友好的なイデオロギー論争を推進しよう。それによって、上に述べたそれぞれの偏向を排し、批判し自己批判を貫徹し、人民の運動の統一の道を切り拓き、階級敵に対してただひとつの共同闘争をもつて抗しよう。それこそが、現在われわれを抑圧している者どもを打倒する道を切り拓く、測り知れぬ規模の運動を生み出していくのだ。

解放闘争における R N (民族抵抗)

サルバドル人民に訴える。現時点においてもつとも意義あるものの復権のために戦う進歩的組織・労働組合・農民組合に力を与え、民主主義的・革命的闘争と結合するため、に結集しよう。

人民の間によりいっそうの組合・労働組織を創り上げ、生活水準の向上を望む広汎な大衆運動の発展に向けて、既存の隊列に新風を吹きこもう。このような組織のなかでは、革命的なより高度な政治目標のために戦う人々も含めた、すべての進歩的・民主的人民が、その活動の場を得ることになる。

(D) その軍事主義的偏向の故に、エルサルバドルにおけるゲリラ組織内部で絶えず起っている分裂の張本人である。

(E) E R P を支配している指導部内部には、人民の運動にとってきわめて有害なこれらの偏向を犯している一団がいる。

(F) もちろんその隊列には、しかるべき路線の下でならば、人民の前衛たりうる立派な戦士がいることを、われわれは信じている。

このような組織的・政治的分裂のさなかで、われわれの組織、R N (民族抵抗) が生まれた。われわれは、人民の運動の分裂の状況を、次のように簡潔に分析し、サルバドル人民のまに明らかにしたい。

(A) われわれもまた、人民の闘争に参加するなかでいくつかの誤まりを犯してきた。われわれの隊列のなかにもセクト主義や、闘争の計画をめぐっていくつかの誤まりがあった。

(B) これらの誤まりを克服していくために、真剣な努力を積み重ねていくことを、われわれはサルバドル人民のまに約束する。

(C) われわれは、われわれの組織の政治的・軍事的団

合言葉は——人民の諸組織を強化し、その発展を阻害している個々の要因を除去し、いっさいを革命戦線の政治運動に結びつけよう、である。

そのためには、広汎な労働者大衆の間により強固な闘争意識と準備とを生み出していくために、ストライキ・デモなどの手段を駆使して経済的・政治的闘争を展開していかなければならない。

軍隊の兵士に訴える。政府に憲法を尊重させるよう戦うとともに、われわれの隊列に加わろう。そこには、社会主義革命のために戦うことを願うすべての将校・下士官・兵卒が結集することができるのだ。

そこは人民の闘争の聖域である。サルバドル人民は誰もがそこに部署をもち、その意識の水準にに応じてしかるべき組織を選んで闘争に参加し、人民の大義をそれぞれ支持していくのである。

そのようにしてはじめて、大多数の者の勝利を保障し、社会主義のための基礎を築くことができるのである。

それはあたかも、人民の叛乱と解放闘争の焔が、帝国主義・ブルジョアジー・軍事独裁に対して燃えさかり、もはや消すことのできない勢いをもっていくことを意味する。その光輝くきらめき、尽きることのないエネルギーに基づく指標の提示が、すべての人民を、革命への長く険しい道

へ導いていくのである。この同じ輝きは、人民に魔手をのばしては迫害し逮捕し投獄し脅迫している、血に飢えた残忍な敵の目をくらましてしまうのだ。敵の弾圧にもかかわらず、人民はこのようにして、前進していくのだ——その決定的な解放と出会うために、抑えがたく、屈することのない不敗の力をもって。

サルバドル人民は不屈である。なぜならば、寡頭支配者・カイヤ軍部は、抑圧と恐るべき弾圧の支配を四百年にもわたってつづけてきたが、そしてまた、独裁者や抑圧者がいままでばらまいてきたどんな口約束も、人民の飢えも寒さもいやすことができないできたが、人民が搾取のなかで感じている哀しみも正義への渴望も決して押しとどめられることなく、逆にそれ故にこそ、人民は、この飢え・悲惨・抑圧に終止符を打つために、打ち破られることのない形態で戦っているのだ！サルバドル人民は不滅である！なぜなら、人民こそ多数派であり、正義の大義のために戦っているからだ。この長期人民戦争は、搾取・抑圧・悲惨にとどめが刺された時はじめて終るであろう。

サルバドル人民は、その決定的解放に向って力強く前進している。RN（民族抵抗）は、その手中に解放の焰をしっかりと握り、革命的プロレタリアートの前衛として確固たる位置を占めて、すべての人民の運動の先頭に立つて前

進している。それ故、RN（民族抵抗）を破壊することも解体することも、まったく不可能である。人民とわれわれの結びつきは、いま、かつてないほど堅固なのだ。飢えに抗議して無数の拳があがり、無数の男女が、RN（民族抵抗）とFARN（民族抵抗武装軍）に加わろうとしている。今こそ人民は、寡頭支配者・帝国主義を打倒し軍事独裁体制を打破するために、強固な決定的闘争を押し進めるべきである。今こそ人民は、その前衛の呼びかけに対して、正確に応えよう。

RN（民族抵抗）を組織しよう！

日々苦しめられている飢えと抑圧を告発しよう！

決定的解放のための闘争に、断固として志願しよう！

FARN（民族抵抗武装軍）万歳！

RN（民族抵抗）全国指導部を代表して

エルネスト・ホーベル・ヌニェス

エルナン・シエンフェグス

アレハンドロ・ララ

〈註記〉いづれの宣言も、78年8月、78年12月に遂行されたRNによる多国籍企業代表捕虜作戦に際して、宣言掲載要求に屈した世界各国紙に掲載された。第三宣言は8月22日付「アサヒ・イブニング・ニュース」紙、第四宣言は12月2日付「日本経済新聞」夕刊に掲載されたスペイン語原文に基づいて訳出した。

「東アジア反日武装戦線」を救援する会通信

準備号 1

¥300

爆破された企業の犯罪史（抄）／『腹腹時計』（抄）他
第1号 ¥300

東アジア反日獄中獄外戦線に合流し戦いぬこう他
第2号 ¥400

1974・8・14天皇ヒロヒト爆殺作戦Ⅱ虹作戦 他

東アジア反日武装戦線は勝利する！！

「東アジア反日武装戦線」を救援する会通信 廃刊号（H）
東アジア反日武装戦線兵士として再び自己を確立
するために／東アジア反日武装戦線獄中兵士団の
再生のために 他 ¥500

「東アジア反日武装戦線」を救援する会通信 廃刊号（F）
東アジア反日武装戦線兵士として再び自己を確立
するために／キンダニ・テメンゴール作戦の切り
拓いた地平をさらに！！ 他 ¥500

9・28反日獄中獄外闘争の

¥300

成果を深化させるために

緊急報告 9・28タカ闘争に獄中から呼応して他

腹腹時計 VOL 2

¥500

基調提起

——中枢殲滅戦を軸とした

大衆的反日都市ゲリラ戦の展開を——

反日武装闘争の勝利のために（1）（2）
反日赤軍への転生を！ 他

腹腹時計 特別号 1

¥500

友へ！ 反日武装闘争の前進に向けて

発行

東アジア反日武装戦線KF部隊（準）
連絡先 KQ通信社

反日革命宣言

——東アジア反日武装戦線の戦闘史——

東アジア反日武装戦線KF部隊（準）著
発売元 鹿岩社
九月末刊 ¥1500

『反帝反日通信』創刊号

KQ通信社

トッパマロスは勝利する！！

獄中同志奪還作戦報告

都市ゲリラの戦術と戦術

革命戦士の規律と綱領 その他

10月20日刊

¥1000